

ソマリア人作家ヌルディン・ファラのこと

宮本 正興

「私はノマドであり、同時にコスモポリタンである。矛盾はない。放浪者の行く所、どこでも自分の世界を運んで行く。至る所に祖国がある」。亡命ソマリア人作家ヌルディン・ファラの述懐である。この作家の半生の軌跡には、前世紀末の植民地分割以後、大国の覇権と戦争の標的であり続けてきた祖国ソマリアの悲しい近・現代史が塗り込められている。

ソマリア半島が、エジプト、エチオピア、フランス、イタリア、イギリスの野望の対象となったのは19世紀末。20世紀初頭に、そこは5つのソマリランドに分割された〔中央北部のイギリス領、南東部のフランス領、南部のイタリア領、西部のエチオピア領（オガデン）、南西部のフロンティア（直接支配はなかったが、後にケニア領）〕。第二次大戦中に再編があり、まずイタリアがイギリス領を征服、1941年イギリスが同地を奪還、ついでイタリア領とオガデンを占領。戦後の48年、イギリスがオガデンをエチオピアに、49年、国連が南部をイタリアに返還した。まさに国際政治の戦略に翻弄されてきたのである。

ファラは、45年にイギリス占領下のイタリア領ソマリーランドのバイドアに生まれた。10人家族の4番目の息子だった。父親はイギリス軍の通訳をしていた。生後間もなく父親の任地がオガデンへ移り、63年のオガデン国境紛争で同地から南部へ帰還。66年から70年までパンジャブ大学で哲学と文学を学び、帰国後はモガディシオの高校や大学で教えた。この間、彼はイタリア語やソマリ語（アムハラ語、アラビア語、パンジャブ語も話す）で短篇や連載物を新聞

に書いた。第一作は、インド時代に書き終えた『曲がった肋骨から』（1970）。社会における女性の状況と役割を問うた作品で、ソマリア人作家初の英語小説。「女性の地位、尊厳の問題について、この作品ほど感受性豊かに肉迫したアフリカ小説はない」との評がある。タイトルは、「神は曲がった肋骨から女を創った。それを真直ぐに伸ばそうとすれば、折ってしまう」とのソマリの格言から採られているという。1973年、地元紙に連載中のソマリ語の小説が筆禍となり、時のシアド・バーレ政権が全作品を発禁処分にし、作家自身に死刑を宣告した。翌年、ファラは祖国脱出に成功した。

最近作『秘密』（1998）までに、かなりの数の小説、戯曲などを発表している。主なテーマは、独立ソマリアのポストコロニアル状況下における人間の自由の問題、そして女性の抑圧である。かつてのナショナリストが独裁者に転じ、自前の政治哲学のないまま、ネオコロニアル状況に甘んじている現状を批判し、ナショナリズムの再定義を求め、民族的アイデンティティの危機を訴えている。「一つの国は、女性市民が解放されるまでは自由だとはいえない。独裁は家庭から始まる」と主張し、伝統的な家族・氏族・部族制度を批判する彼にとって、ジェンダー、ナショナリティ、セクシャリティの問題は、真に解放されたソマリアを創出するためのメタファーとして存在している。今はケープタウンに住む。

（みやもと まさおき
大阪外国語大学教授）